

令和6年度「京都市地域コミュニティ活性化推進審議会」第2回 第1部会摘録

（テーマ1：地域住民をはじめ、大学や地域企業など多様な主体が地域活動に参加しやすくなるきっかけや担い手を増やす仕組みづくり）

日 時	令和6年12月4日（水）午後6時～午後7時25分
場 所	京都市役所分庁舎地下1階 地域自治推進室 会議室
出席委員	5名（中本部会長、宇野委員、河合委員、橋本委員、前田副会長）
欠席委員	3名（尾崎委員、森本陽介委員、志藤会長）
傍 聴 者	なし
事 務 局	地域自治推進室：平井、鳴海、早崎、小林、中野、清水 総合企画局総合政策室 SDGs・市民協働推進担当：太田、荻原
議事次第	1 第1回部会の振り返りと第2回部会における論点と方向性等について 2 テーマ1について意見交換 3 その他（事務連絡など）
会議資料	資料1 委員名簿 資料2 座席表 資料3 京都市地域コミュニティ活性化推進条例施行規則 資料4 第2回部会資料

【議事内容】

1. 第1回部会の振り返りと第2回部会における論点と方向性等について

資料4に基づき、事務局から地域コミュニティの現状と議論の方向性等について説明。

2. テーマ1について意見交換

テーマ1：地域住民をはじめ、大学や地域企業など多様な主体が地域活動に参加しやすくなるきっかけや担い手を増やす仕組みづくり

<主な意見>

橋本委員：私も多様な主体に地域活動に参加いただければと考えており、自称「屋台家」と名乗って活動している。私の活動では支援される側であった方たちも、主体となって自分たちの街に関われるようになることを目指しており、肩書や立場に縛られずに出会える場があればと考えている。何かするために集まるのではなく、楽しいし行ってみようかと思えるような場があって、そこで出会う中でお互いの課題感が共有できるという順番の方が、お互いのことがよくわかって、お互いの持つ力もわかりつつ進む方向を決めていけるんじゃないかと思う。学生や地域という風に分けて出会うのではなく、「人同士で出会う場」があってもいいように思う。

河合委員：地域の方々は企業にこういったことを期待されているのだろうか。前回も人的な話と資金的な話があったかと思うが。

宇野委員：企業側からも地域に接点を求めているように感じている。ライオンズクラブやロータリークラブのような奉仕活動をされている団体の方はどういう風に役に立てるか、といった話もされているので、地域団体や活動団体から求められていることを明確に示せばつながりができるのではないかと。

私が代表を務める法人でイベントを企画した際には、多くの企業から協賛や出展など、それぞれの企業ができることを協力していただいたが、企業に協力を求める時にはどういう意図や思いで行う活動か、企業にとってどんなメリットがあるかを示すことは重要だと感じた。メリットというのは地域と関わることも大きくあると思うが、「会社としてこんなことに貢献している」ということが、従業員の方にとっての動機付けにもなりうる。また、参加した企業の方から、アルバイトの方が、お店の中でのルーチンの仕事ではなく、外に出ていつもと違う仕事をする事で「いい仕事をしたな」という感覚を持てることや、社員が社長の一生懸命な姿を見れたりすることは社内の活性化にもつながる、とのお話もいただいた。地域活動に参加することは企業にとっても色々な刺激になるということを伝え、巻き込んでいってはどうか。

橋本委員：私は、1人が1台持ち運べる屋台を通じて、自分を自由に表現できる場を作るという活動をしている。その活動の中では、例えば行政や企業の方にも肩書きなく会うことができ、その人個人の興味や考え方などの人となりがよくわかるので一緒に何か活動する場合でも非常にやりやすくなると感じている。

また、大学生についても話してみたら専門性を持っていたりとか、知識を持っていたりとか、いろんな興味を持ってる方がいるので、その人の個性をお互いが分かり合える関係性が作れば「ここを手伝ってもらえるかもしれない」ということも考えやすく、主体的に関わってもらいたい時に一緒に進めやすいように感じる。

中本部会長：私の所属する京都「おやじの会」連絡会では、「O（おやじの）K（子育て参加に理解がある）企業」という取組で企業と連携している。OK企業には、京都「おやじの会」連絡会が主催する研修会を案内しているが、直近の研修会で10社ほどの企業が参加されており、地域活動に興味をお持ちの企業も一定数いると実感している。

また、私自身も零細企業を経営する立場から、本業を通じて地域課題解決に一企業としての貢献方法を模索しているところ。地域ニーズを捉え、本業を通じて課題解決につなげていきたい。皆さんの意見を参考にさせていただきたい。

前田副会長：企業であれ、大学生であれ、自分たちのメリットになることや、表現したいこ

とややりたいことで活動できると、関係が長続きしやすいという話をいただいた。

そのような地域に関わりたい人や企業が集まれる場や、地域と出会う仕掛けをつくるのがポイントになるかもしれない。

宇野委員：まず社会活動に熱心なキーとなる企業があり、その取引先や活動理念を共有する方達との人脈から、他の企業を紹介してもらったりということがある。そうしたネットワークを活用することで、地域活動への協力を得やすくなり、一度縁があれば、活動の幅が広がりやすい。

また、地域側が、子ども、環境、文化など、活動に対してラベリングすることができれば、そのラベリングに関する活動を求める人達が集まってきやすいと思う。

橋本委員：企業と地域、大学それぞれのネットワークが分断されているように感じている。分かれているセクターをつなぐ場や人の役割が大事ではないか。

河合委員：地域貢献には、ビジネスにつながるチャンスや参加することにより承認欲求が満たされるなど、多様なメリットがある。一方で、地域側は継続可能な活動を求めており、地域のニーズと貢献できる人材のマッチングが課題。

不動産関連で言えば、地域活動に貢献することで地域とのつながりができ、地域内の空き家問題を相談してもらいきっかけになるなど、地域に貢献しつつビジネスの拡大にもつながる。

中本部長：担い手確保の点では、こういった仕組みが考えられるか。

宇野委員：子どもが参加する行事等には、保護者も同行することが多いように思うので、子どもがイベントを楽しんでいる間に、保護者にアプローチできるような仕掛けが効果的ではないか。子どもたちが楽しめるイベントをきっかけにして、大人との関わりを増やせるのではないか。

前田副会長：防災に関する取組は必要であるにも関わらず、若い世代にあまり来てもらえない。「必要だから」というのは一つの理由にはなるが、参加の動機はそれぞれであるため、子どもを連れて行ける、楽しめる、といったところのきっかけはやはり大事であるように思う。

中本部長：私が所属する山科区の公園愛護協力会では、公園に設置されたかまどベンチを活用し、炊き出し訓練という名目でイベントを実施している。そのかまどベンチを使って防災訓練を行うという案内をすると、学生から高齢者まで100人規模の参加があった。

広報の方法を工夫することを考えていいかもしれない。

河合委員：確かに広報を強化することで、地域活動を知らない人の参加につながる可能性はあるが、上手く広報しても、興味のない人に参加してもらうことは困難なの

で、強制的に参加させるくらいの仕掛けが必要ではないか。

企業の場合、社員に参加を強制した結果、地域活動に消極的であった社員が「意外と楽しかった。」と感じて継続的な参加につながるケースもあるので、参加のきっかけは半強制でもよいように思う。

宇野委員：企業の中には、ボランティア活動における出会いや経験自体に価値がある、との理解のもと、会社から減給もされず、活動先で謝礼ももらえるボランティア休暇という制度を設けている企業もある。企業が制度を構築すれば、社員が活動に参加する機運が高まる可能性はある。

大学の場合は、単位取得に必要な活動にしてしまうといった仕組みを構築しやすいのではないか。

河合委員：学生には単位というメリットがあるので、地域側がメリットを見出せるか。お互いのメリットのマッチングが大切になる。

前田副会長：強制は確かに参加のきっかけにはなるが、継続的な活動にはつながりにくい。

参加者が自主的にかかわることができる余地が大切。

また、単位のための活動の場合、学生に活動内容や課題を提供し続ける必要が生じるので、地域側や教員が疲弊するおそれがある。

マッチングという観点では、行政や大学など大きな主体だと柔軟に動けないので、間に入る人材をいかに確保し、広げられるかが課題。

宇野委員：町内会やPTAなど、昔からやり方が変わっていないことが問題ではないか。

今の時代に合わせて内容を見直していく必要がある。

橋本委員：せっかく参加してくれた方が継続しないケースでは、主体的に関わることできていない場合が多い。前例踏襲の活動に参加させられるだけでは面白くないので、自分に関わることで活動を変えられる、より良くてできると思えると、「やってみよう」につながると思う。そのためには新たな担い手を受け入れる地域側が変わっていくことも必要なのではないか。

中本部長：PTAでも長く関わっている方は活動内容を見直すことができるが、1～2年で交代するような場合は、活動の見直しまでは難しい。

前田副会長：町内会の役員は1～2年の任期が多いので、活動内容の見直しまで至らず、任期をこなすだけというケースが多いように思う。

子どもが参加できる場が重要になるのではないかと、という宇野委員からの御提案について、地蔵盆やお祭りなどの昔からある地域行事には、子どもが参加できるものが多かったが、今では少なくなっている。子どもを中心とした場づくりは考えられないか。

中本部長：お祭りなどの行事においては、子どもが参加できるプログラムの時間帯は保護者も集まるが、プログラムが終わると一気に引いてしまう。同じ会場には残って

いるので、交流会などを開催すれば食い止められるかもしれない。

橋本委員：イベントに集まった人が他の年代と交流を広められる場があればいいのではないか。

参加者もお客さんとして参加するのではなく、出番があれば参加者同士の顔の見える関係ができ、つながりが生まれるのではないか。

中本部長：皆が参加できる盆踊りなどのプログラムがよいのかもしれない。

河合委員：大規模なものではなく、地域の神社などが主催する規模の小さいお祭りを毎年開催する方が交流は深まるように思う。規模が大きいとその時は盛り上がっても交流自体はあまり広がらないように思う。地域の子どもが参加するだけでなく、地域外に出ていった大人もお祭りを目的に帰ってくるケースもあるのではないか。

中本部長：私は小学生時代の夏祭りが良い思い出となっていたため、母校の小学校の夏祭りを復活させてもらったところ、多くの参加者に来場いただいたので、コミュニティの場として生かせると思う。

宇野委員：子どものときの体験が大人になったときに活かされる印象があるので、即効性はないが15～20年後を見据えて、子ども向けの活動を継続することには意味があると思う。

現在の活動内容の検討に当たっては、地域や企業、学生などの活動ややりたいことを理解したうえでつないでくれる、まちづくりアドバイザーの存在が非常に大きいのではないか。色々な場に顔を出してくれるまちづくりアドバイザーのような方が多様な主体をつないでくれれば、うまく連携した活動を企画できると思う。

河合委員：地域のニーズを知ることができれば、若者がその担い手として活躍できると思う。例えば、買い物に困っている高齢者の代わりに学生が買い物に行くなど、地域の高齢者が困っている・望んでいることを学生につなぐことができれば、学生の地域活動への関わり方のメニューが増えるのではないか。

宇野委員：若者に話し相手になってもらいたいと考えている高齢者は多いように感じる。

河合委員：高齢者が若者と関わることができ、同時に若者も地域活動に貢献できるような場があれば理想的。

橋本委員：高齢者の中には支えが必要な方もいるが、自分の力を発揮して地域に貢献したいと思っている方もいる。若者と話したいというのも自身の体験や思いを教えてあげたいという気持ちからかもしれない。支えてもらう側も多様な主体の一人として地域を支える立場になれる可能性もあると思う。ただその場がないと考えている人は多いように思う。

中本部長：最後に前田副会長に本日の総括をお願いしたい。

前田副会長：企業、大学、地域それぞれが地域に関わる動機については、単純に人の役に立ちたいという奉仕の精神もあれば、社内活性化につながるという具体的なメリットがある場合もあるほか、地域に貢献することがビジネスにつながっているなど様々であるということが分かった。

また、様々な動機やメリットを持つ人たちが一緒に活動するためには、企業、大学、地域など、総体として考えることはできず、個人としての関わりをいかにマッチングしていくかが大切であり、マッチングのきっかけについては、場所や人、あるいは情報や広報となる場合もあるため、どのように用意していくのが重要になる。

地域活動に参加するきっかけを生み出す仕組みとしては、京都ならではの歴史的・伝統的なお祭りや運動会など、半強制的に参加しなければならない行事を活用する方法もあれば、宇野委員から紹介のあったボランティア休暇のような制度を構築し、本人にとって参加することがメリットになるようにする方法もある。

また、子どもが参加でき、楽しい体験ができる場があることは、成人後に地域のために活動してくれることにつながるので、長期的な視点での地域への人材投資という点で非常に重要だという御意見や、高齢者や障害者の中には、地域に貢献したいと思ってる方もいるので、そういった方々の参加のきっかけを作っていくことも大事という御意見もあった。

本日は企業、大学、地域の議論がメインとなり、NPO等についてまでは議論が及ばなかったもので、今後の課題になるかと思う。

事務局：本日は、熱心な議論をいただき、御礼申し上げます。本日いただいた御意見も踏まえ、来年春頃をめどに開催予定の次回審議会において、次期ビジョンの素案を御提示させていただきたいと考えている。